

札幌農学校と建学の精神

— 青年・岩崎行親の精神的風土について —

三 浦 嘉 久

はじめに

岩崎行親（1857～1928. 旧制第七高等学校造士館初代館長。以下岩崎と表記）は札幌農学校に、内村鑑三（1861～1930. 以下内村と表記）、新渡戸稲造（1862～1933. 以下新渡戸と表記）たちとともに第二期生として入学し4年間の生徒時代を送り卒業した。

執筆者の「岩崎行親の生涯と札幌農学校」を主題にする研究は、札幌農学校教育が岩崎の人間形成にどのような影響を及ぼしたかを追究するもので、現在継続中で未完である。

本研究の内、岩崎の概説的な紹介については、「岩崎行親の生涯と業績」として『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第41号（2011）に掲載され、岩崎が札幌農学校に入学するまでについての研究は、「岩崎行親の生涯と札幌農学校（2）—ある国粋主義者の札幌農学校教育に対する受容と抵抗—」として『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第42号（2012）に掲載された。本稿は既稿の続稿にあたる。

本稿では岩崎が学んだ札幌農学校がどのような学校であったかを「建学の精神」の考察をとおして究明することを課題とする。というのも札幌農学校と創設期の「建学の精神」は、青年・岩崎の精神的風土であったからである。

そして次稿において岩崎が札幌農学校でどのような生徒生活を送り、札幌農学校教育が岩崎の人間形成にどのような影響を及ぼしたか、別言すれば岩崎の札幌農学校教育に対する受容と抵抗を究明したい。

1 札幌農学校

(1) 札幌農学校の創設

岩崎たちが学ぶことになる札幌農学校は、開拓使が創設した学校であった。

開拓使は、太政官に直属する中央政府機関であり、大蔵省、兵部省、刑部省、外務省、民部省、宮内省の6省と並ぶ位置にあった。そこには長官、次官、判官等が置かれ、長官には太政官下の諸省の卿と同等の地位が与えられた。新政府は1869（明治2）年7月には官制改革を行い、「諸地ノ開拓ヲ総判スルコトヲ掌ル」機関とし開拓使を設置して、蝦夷地開拓に取り組むことにしたのである。

開拓使は1872（明治5）年、開拓使仮学校を東京に設立し、仮学校と略称されるこの学校は1875（明治8）年に札幌に移転し札幌学校と改称され、さらに札幌農学校となった。

札幌農学校は開拓長官黒田清隆（1840～1900. 鹿児島県出身。以下黒田と表記）によって、その顧問米国人ホーレス・ケプロン（Horace Capron. 1804～1885. 前アメリカ合衆国農務局長）の進言に従い農学全般にわたる教育機関としてアメリカ東部、ニューイングランドにあるマサチューセッツ農科大学（Massachusetts Agricultural College. 創立1863年）をモデルにして設立された⁽¹⁾。特にアメリカの農科大学が選ばれたのは、この国が短日月の間に偉大な開拓事業を完成したという事実と当時の外交情勢によるアメリカの働きかけがあったためという⁽²⁾。また、開拓使がマサチューセッツ農科大学を札幌農学校のモデルにした理由はいくつか考えられる⁽³⁾。ケプロンが森有礼（1847～1889. 鹿児島県出身。当時、駐米小弁務使。公使相当の外交官。以下森と表記）に、マサチューセッツ農科大学をアメリカの最良の教育機関として推薦したこと⁽⁴⁾や、クラーク（William S. Clark, 1826～1886）が言う、次のような日本高官の視察という契機もあっただろう。

(1) 教則は別紙の如く『マサチューセッツ州』農校の課目を取捨（北海道大学編・発行『北海道大学創基八十年史』1965、13頁）。

(2) 前掲、2頁。

(3) 開拓使にはマサチューセッツ農科大学の出身者が奉職しており、御用掛湯地定基（1843～1928. 鹿児島県）はその一人で、仮学校専門科開設委員であった。

(4) ジョン M. マキ著 高久真一訳『W.S. クラークとその栄光と挫折』北海道大学出版会、1978、147頁。

「使節団はマサチューセッツ農科大学を視察し、大学の構想と目的を知り、実験室と野外で学生が勤しむ姿を見、そしてライフルと大砲を装備して整列しつつ教練に励む様を目の辺りにして、即座に叫んだ。『これこそ日本に必要な学校だ。国民が自活し国を守る教育に有用だろう。』と。この時から、日本において異例の努力が始まったのである。」⁽⁵⁾

色々な経緯を経てクラークの招聘を決定したのは吉田清成（1845～1891. 鹿児島県出身。当時、駐米特命全権公使）である。クラークは札幌農学校の初代教頭⁽⁶⁾として選任され建学の任に当たることになり、実質的な初代校長として勤めた。クラークは札幌農学校の教員としてマサチューセッツ農科大学の教え子であるウィリアム・ホイラー（William Wheeler, 1851～1932）とデイヴィッド・P・ペンハロー（David P. Penhallow, 1851～1910）を同伴した。

札幌農学校は1876（明治9）年8月に開校した。校長は調所廣丈（1840～1911. 鹿児島県出身。以下調所と表記）、修業年限は4年、本科4年、予科3年の編成で開校時の生徒数は24名であった。生徒は貸費生（官費生）とした。官費生ははじめ1人1ヵ月金13円を支給され、校内一切の費用は政府が負担した。人数は予算の関係上50名を限度としていた。卒業後は籍を北海道に移し、5年間道内に居住して、開拓使に奉職する義務が負わされた⁽⁷⁾。

(5) William S.Clark, "The Agriculture of Japan", *Twenty-Sixth Annual Report, Secretary of the Massachusetts Board of Agriculture for 1878* (Boston, 1879), 112（山本玉樹編著『W.S.クラーク博士論文集』北海道大学、1993、489頁）。クラークの言う使節団とは1871（明治4）年、アメリカとヨーロッパを訪問した岩倉使節団を指すが、使節団はマサチューセッツ農科大学を訪問していないようである。即ち、久米邦武編田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』（岩波書店、1985）及び宮永孝『アメリカの岩倉使節団』（筑摩書房、1992）において訪問の記載が見られない上、ジョン M. マキも「アマーフトまで足を伸ばしたとは一寸考えられない」（ジョン M. マキ、前掲書、153頁）としている。高官の視察についてジョン M. マキは同年夏、森有礼がクラークの案内で視察中の出来事とし、「これが、構想中の札幌農学校のモデルとしてマサチューセッツ農科大学が選ばれ、クラークがその開校責任者としてその教頭に選任されたことに、何らかのつながりがあったと考えられる」としている（ジョン M. マキ、前掲書、151頁）。

(6) クラークは「教頭」（『札幌農養第一年報』開拓使、1878、1頁；『覆刻札幌農養第一年報』北海道大学図書刊行会、1976）とあるが、英語では President（"FIRST ANNUAL REPORT OF SAPPORO AGRICULTURAL COLLEGE 1877.", Tokei, The Kaitakushi, p.38.; 復刻版『1st Annual Report of Sapporo Agricultural College』北海道大学図書刊行会、1976）となっており、それは通常学長の意味である。

(7) 「本校設立ノ要旨 札幌農養ハ諸少年ヲ教育シ之ヲ習練セシメ業成ルノ後乎ハ之ヲ開拓使員トナシテ五ケ年間奉務セシメシメカ爲メニシテ開拓使ノ設置スル所ニ係ル生徒ノ人員ハ五十名ヲ限リ其在校中ノ諸経費ハ一切官ニ於テ之ヲ辨スル者トス」、前掲、『札幌農養第一年報』、69頁。

(2) 札幌農学校の歴史的意義と鹿児島人

札幌農学校は名称からは今日ある種々の実業学校の一つのように聞こえる。しかし学校の実態は、4年の課程を修了すれば理学士（バッチエラー、オフ、サイエンス）の学位⁽⁸⁾が与えられるなど、わが国の近代的な大学の先駆例である。法、理、文、医からなる東京大学が創設されたのは、やや遅れた1877（明治10）年4月である。この時代では、札幌農学校は東京大学とならぶ数少ない官学の高等教育機関であった。なお、東京大学農学部の前身である駒場農学校が開校したのは1877（明治11）年4月であるから札幌農学校はわが国における最初の高等農業教育機関でもある。

札幌農学校は黒田を初めとする鹿児島人によって創設されたといっても鹿児島県民の身びいきにはなるまい。「北海道開拓行政の最高指揮者として北海道発展の基礎づくりに重要な役割を果たした⁽⁹⁾」黒田は1870（明治3）年、「大小学校を興⁽¹⁰⁾」すことを建議し、このことが札幌農学校創設の布石となったが、その後開拓長官として札幌農学校の創設にあたった。「新日本は薩長政府の賜物なりといふは虚偽の最も大なる者なり⁽¹¹⁾」などと薩長政府を厳しく弾劾した内村も、黒田の逝去にあたっては、「黒田清隆伯逝く、余に深き感動なき能はず 嗚呼伯なかりせば農学校はなかりしなり、農学校なかりせば余は札幌に行かざりしなり、札幌に行かざりしならば余は聖書と基督教とに接せざりしなり⁽¹²⁾」と深く追悼している。実に黒田は「札幌農学校の一大恩人⁽¹³⁾」と言われている。夙に札幌農学校創設の必要性を黒田に提言したケプロンは、黒田が欧米視察の際に駐米公使森の斡旋によりユリシーズ・グラント大統領（Ulysses S. Grant. 1822～1885）と会見し彼が拓殖の指導者を懇願したので、大統領から推薦を受け開拓使顧問に迎えることができたのであ

(8) 前掲。しかし卒業時に授与されるのは農学士となったから、第一期生から異論が出た。代表者が調所校長に陳情したが、受け入れられなかった（大島正健著、大島正満、大島智夫補訂『クラーク先生とその弟子たち』1991、新地書房、193頁）。

(9) 馬見州一『鹿児島と北海道』春苑堂出版、1997、228頁。

(10) 「北海道拓殖に関する意見九ヶ條」（北海道大学編著『北大百年史 札幌農学校史料（一）』ぎょうせい、1981、3頁）。

(11) 1897（明治30）年4月23日『万朝報』（内村鑑三『内村鑑三全集』4、1981、岩波書店、127頁）。

(12) 1900（明治33）年9月12日『福音新報』272号（内村鑑三『内村鑑三全集』8、1980、岩波書店、268頁）。

(13) 北海道帝国大学編・発行『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』1926、66頁。

る。クラークの招聘も、黒田がアメリカ駐在公使の吉田に札幌農学校教頭の適任者の選任を依頼し、吉田がクラークに交渉して実現した。また、札幌農学校設置にあたり開設委員として設置計画の構想、開学の具体的な準備を担当した職員は開拓幹事調所、森源三、湯地定基（1843～1928。鹿児島県出身）、井川洌、堀誠太郎の四人であった⁽¹⁴⁾が、調所、湯地は鹿児島人である。鹿児島人は創設関係者として多いだけでなく、その功績も多大であった。

2 札幌農学校の「建学の精神」

(1) 「建学の精神」

学校は各々その固有の設立目的をもって設立されている。私立学校の場合、その多くは設置者・創立者の抱負、期待や理念が設立目的に「建学の精神」(Geist, spirit, or philosophy)、すなわち学校のかたちを示すものとして込められ、学校の個性や行動規範として代々継承されている⁽¹⁵⁾。これに対し国公立の学校では設置者・創立者の顔が見えず、「建学の精神」も明らかでない場合が多い。

札幌農学校は官学であったが、黒田及びクラークを創立者といっていし⁽¹⁶⁾、設立時に「クラーク精神」などと言われる「建学の精神」が認められる点において異色の存在である。

本稿においては札幌農学校の岩崎たちが在学した創設期に表れた「建学の精神」のかたちを見ておくことにしたい。

(2) 札幌農学校の「建学の精神」

札幌農学校の「建学の精神」は、1876（明治9）年8月14日の開校における黒田開拓長官の式辞およびクラーク教頭の演説を淵源にしている。

黒田は札幌農学校の設置者であるところから、式辞に述べられた札幌

(14) 北海道大学編、前掲『北海道大学創基八十年史』、9頁。

(15) 「建学の精神」とは広義において大学の研究、教育及び大学経営に関する在り方であり、狭義において教学（教育及び研究）の在り方、そして最狭義において教育の在り方（教育理念、教育方針など）を指すが、多くは最狭義において使用されている。本稿においては狭義に捉える。各大学の言う「建学の精神」は創設時に既成のものとして存在する場合もあるし、学校の歴史とともにはぐまれる場合もある（参照、矢澤西治他編『建学の精神』日本私立大学連盟、1985）。

(16) クラークを「我が校の創立者」と呼んだ例もある（札幌農学校學藝會編『札幌農学校』裳華房、1902『復刻 札幌農学校』北海道大学図書刊行会、2005、45頁）。

農学校の意義は札幌農学校の「建学の精神」の前提を成すものである。
黒田によれば札幌農学校の意義は次のとおりである。

農業は拓地殖民の道に於て将さに専務とすべきを以て、尤も本使の意を注ぐ所なり。顧ふに我邦の農業たるや、多くは之れを老農老圃の実験に得、法の取る可き無きに非らずと雖ども、徒に慣習に因仍し、格致の学を講じて以て之れを闡明推廣する能はざるを以て、終に其進歩の効を見ず。故に今農学校を設け、教師を海外に聘し、英を育し、蒙を啓き、以て農学の面目を一新せんと欲す。果して能く斯の目的を達するに於ては、豈独り一道に功あるのみならんや、将に以て全国に普及せんとす⁽¹⁷⁾。

すなわち札幌農学校は、北海道を農業により開拓するにあたり、農業そのものを近代的に改革する必要があり、このために必要な新鋭の開拓指導者を養成することを目指すものであった。

黒田が示した「建学の精神」を踏まえ、これを教育者の観点から「建学の精神」となる理念を示したのが、実際の創立者であるクラーク教頭の演説である。

予は今マサチューセッツ農科大学の二人の出身者と共にこの地に彼れと同一の教育機関の基礎を築かんとして來れるものなるが、この新設農学校は将来北海道に於ける農業の改良と生産的大産業の発展の上に寄与する所多大なるべきを、信じて疑はず。

学校及び大学の設立並に維持は、正に有らゆる進歩的政府の最も重要な職分の一として認めらる。然れども農工業教育機関が欧米に於て相当注意を惹くに至りしは最近のことに過ぎざるに拘はらず、黒田長官閣下が始めて北海道に於て一の農科大学 (a college of agriculture) を建てたることは洵に偉とすべし。馳てそれが大なる成功を収めて閣下の政策の賢明なるを立証せんことを期待す。

当地にこの最初の教育機関を組織せんが為めに招かれたる吾人は、其崇高なる職務に於て熱心に本分を尽さんと欲す。我等は各自

(17) 北海道大学編、前掲『北海道大学創基八十年史』、22頁。

の実践と教授とに依て、新入の青年学生の中に人生の福利上最も適切なる心情を啓発すべく努力すべし。母国に対する愛国的奉仕に依って、相応の資産と不朽の名声と且又最高の榮譽と責任とを有する地位を既に自ら贏ち得たる閣下より予が聞く所によれば、帝国政府現在の政策中には農学校の各員が閣下の卓越せる先例に倣ふ事を妨げ、若くは閣下と同一なる徳性の訓練に依て閣下と同一なる顕要の地位に到達することを遮るが如きものは何等存在する事なしと。東洋諸国民を多年暗雲の如く包みし階級や因襲の暴君の手よりこの驚異すべき解放は教育を受くる学生諸子の胸中に自ら崇高なる大志 (a lofty ambition) を喚起するに至るべし⁽¹⁸⁾。

そしてクラークは次のように期待する人間像を描いて示した。

青年紳士諸子 (young gentlemen)、翼くば諸子は皆諸子の最も誠実有力なる勤務を大に要望する所の母国に於て、勤勞と信認と又其より生ずる榮譽の最高位置を得んが為めに努力せよ。諸子の健康を保ち諸子の食慾と性慾とを制し、従順勤勉の習慣を養ひ、且諸子が勉学の機会を有する種々の学科に就き能ふ限りの知識と熟練とを獲得せよ。かくして諸子は重要なる地位に向って自らを準備することとなる。この重要な地位は常に誠実勤勉にして活動的人物を求めつ、あるも、而もかゝる人物は諸外国に於けると等しくこの国に在ても一般に供給は需要を満たすに足らざるの有様なり⁽¹⁹⁾。

クラークの演説には、よき指導者養成のために「英を育」すべく構想された札幌農学校の教育理念がよく表明されている。この演説はまた、いわゆる「クラーク精神」の根柢をなすものでもある。

指導的立場に立つ者にふさわしい徳性を備えた近代人の人間形成は、そもそも札幌農学校の創設者である黒田がかねて痛感していたものであった。クラークはこの人間像を、すなわち「崇高なる大志」を有し「勤勞と信認と又其より生ずる榮譽の最高位置」を目指して常に誠実勤勉に

(18) 前掲、22-23頁。

(19) 前掲。

して活動的な人物という全人的な指導者ととらえ、札幌農学校の目指す教育の核心に据えた。

(3) 「札幌農学校の精神」

「札幌農学校の精神」は、札幌農学校の創設者、黒田及びクラークが近代的な人格の農業指導者の育成を構想していたことに由来する。

蝦名賢造（1918～2009、以下蝦名と表記）によれば、「札幌農学校の精神」は、「まず、ピューリタニズムの起源への忠実な志向、ピューリタン精神、つぎに近代自然科学とその実証主義、そしてフロンティア・スピリット、これら三つのものがいわば三位一体になったもの」⁽²⁰⁾として結びつけられていたという。本稿においては「札幌農学校の精神」について蝦名を踏まえつつ、以下に論ずる。

i) 西欧近代科学と実証主義

「札幌農学校の精神」として先ず西欧近代科学と実証主義を挙げたい。西洋近代科学の導入は開学の式辞において黒田が力説しており、「教師を海外に聘し」た札幌農学校の創設はその実現であり、クラークも開学の演説でその意義を「黒田長官閣下が始めて北海道に於て一の農科大学（a college of agriculture）を建てたることは洵に偉とすべし。」と演述している。この大学こそ近代科学の拠点として西欧においても19世紀初頭によく成立したものであった⁽²¹⁾。

科学史家でもあった下村寅太郎（1902～1995、以下下村と表記）は、札幌農学校は「単に日本に於ける最初の農学校であるといふだけの教育史や学校史の事件ではない。それは北海道開拓に近代科学を導入しようとする底の規模をもった先駆的企図であって、正に日本の精神的意義をもつ事件である。（中略）さうして此処では科学は単に実験室内のものでなく、廣漠たる極北の邊境の開拓である。室内の専門家の科学でな

(20) 蝦名賢造『札幌農学校』図書出版社、1980、143頁。因みに「札幌農学校建学の理念」は「指導者が強健な肉体、健全な精神、厳格な道徳心、物事を多角的に捉える幅広い見識、そして近代国家の形成に牽引車的に生きる人間一社会性、人間性、良識、良心を総合して備えた極めて自立した一人の人間を育成すること」とする説もある（小枝弘和「札幌農学校建学の理念—W・S・クラークの教育思想とその実践を中心に—」北海道大学百二十五年史編集室編『北大百二十五年史 論文・資料編』北海道大学、2003、38頁）が、これは基本理念（原理）の具体化と見るべきものであろう。

(21) 参照、佐々木力『科学論入門』岩波書店、1996、14頁。そしてクラークはアマースト・カレッジを1848年に卒業後ドイツに留学し、近代的大学の一つであるゲッチンゲン大学で博士号を得た。クラークはアマーストの卒業生中最初のドイツ留学学者であり、彼によってドイツの科学は初めて直接にアマースト・カレッジで紹介された（矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第二十四巻、岩波書店、1965、453頁）。

くフロンティアの科学である。』⁽²²⁾と指摘している。近代科学は西欧においても19世紀に成立した⁽²³⁾ばかりであり、札幌農学校は近代科学をその成果を応用した近代技術とともにいち早く導入した高等教育機関であった。札幌農学校は最新の西欧近代科学を導入して「農業の改良と生産の大産業の発展に寄与する」⁽²⁴⁾専門的な教育・学問を行おうとするものである。そこで札幌農学校は、農業に関する科学である農学及び農学の応用である農業技術を教育することを先ず主旨とした。そこで「農業生産の中で提起される具体的、実践的課題を自然の法則的認識を不断に深めることで科学的に解決することを目指す」⁽²⁵⁾した。矢内原忠雄(1893~1961。以下矢内原と表記)は、札幌農学校第二期生の内村及び新渡戸の門下生であり、「キリスト教の信仰を与えてくれた内村鑑三先生の信仰と、humanity〔人間性〕の思想を与えてくれた新渡戸先生の思想とが私を導いてくれた二つのもの」⁽²⁶⁾とし、「私はやはり死ぬまで私の先生は内村先生と新渡戸先生であった」⁽²⁷⁾と言う自称「札幌の子」⁽²⁸⁾である。矢内原は、内村が学んだ札幌農学校の三つの性格を挙げて、「第一は、理学、今日のことばで言えば科学であります、科学を修め、産業を通して近代日本の建設に貢献することが、札幌農学校創設の趣旨でありました。」⁽²⁹⁾と指摘している。

下村は、札幌農学校の創設を「現在の我々の眼で見ればこれの歴史的な性格や役割を理解することは出来ない。」⁽³⁰⁾、「農学校はこの時代に於ては漸く北米に於て試行されたばかりのものである。その意味でも始めて札幌に農学校が創立されたことは劃期的事件であつた。」⁽³¹⁾と言うが、至言であろう。

近代科学の導入は、また、科学の客観性を担保する方法論としての科

(22) 下村寅太郎「北海道における形成」鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』岩波書店、1956、133-134頁。

(23) 「今私たちが『科学』と呼ぶ知的活動が西欧に成立したのは、一九世紀のことだった。」(村上陽一郎『科学の現在を問う』講談社、2000、8頁)。

(24) 北海道大学編、前掲『北海道大学創基八十年史』、22頁。

(25) 山本玉樹編著、前掲書、31頁。

(26) 矢内原忠雄『土曜学校講義』第四巻、みすず書房、1972、313頁。

(27) 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第二十四巻、前掲書、643頁。

(28) 前掲。

(29) 前掲、551頁。

(30) 下村寅太郎、前掲書、133-134頁。

(31) 前掲。ちなみに近代大学の嚆矢は19世紀初頭創設のベルリン大学(フンボルト大学)とされている(村上陽一郎『人間にとって科学とは何か』新潮社、2010、19頁)。

学的精神、すなわち近代合理主義、特に実証主義の導入でもあった。

クラークが、札幌農学校に着任したその時から、すぐに手がけたことは、札幌を中心とする徹底した気象観測であった。自然の観察、植物諸相の観察の徹底は、自然科学者 Dr. クラークの一貫した姿勢であった⁽³²⁾。

次の挿話は札幌農学校の実証的精神の一例と解することができる。

彼が、在校の一日學生と相携へて、雪を踏で、札幌の巽位に聳ゆる手稻山に遊び、植物標本を得んとして、偶々珍奇の地衣高く古梢に懸るを認め、自ら樹下に葡伏して、踏臺となり、學生を促して之に登らしむ、學生某乃ち靴を脱して、之に乗らんとしたるに、彼れ大に叱責して云く、曷ぞ斯の如く、遠慮するを須みんと、是に於て我年少の一學生は、米國の一偉人を土足もて踏み、地衣を取るとを得たりと云ふの一事、以て彼が性行の全豹を窺ふに足らん⁽³³⁾。

後年、クラークは、「われわれは科学的な農業 (scientific agriculture) の進展のために真摯かつ熱心に努力したが、それは深い謝辞を受けることになり、大日本のロマンに満ちた大地に豊かで価値の高い成果をもたらした⁽³⁴⁾」と札幌農学校での成果を母国人に報告している。

ii) 崇高なる大志

「札幌農学校の精神」として、第二に、「崇高なる大志」(lofty ambition) の精神を挙げたい。

クラークは開校式において生徒に“lofty ambition”(崇高なる大志)を持するよう呼び掛けている。「崇高なる大志」こそ「クラーク精神」の神髄とも呼ぶべきキーワードであり、豊かな内容を持つものである。

「崇高なる大志」の内容を成す一つは、クラークがその任期を終えて札幌を去る時に生徒に贈った言葉、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(Boys, be ambitious.) であろう。

(32) 参照、山本玉樹編著、前掲書、1993、15頁。

(33) 札幌農学校學藝會編『札幌農学校』裳華房、1902、47頁（『復刻 札幌農学校』北海道大学図書刊行会、2005）

(34) William S.Clark, “The Agriculture of Japan”, *Twenty-Sixth Annual Report, Secretary of the Massachusetts Board of Agriculture for 1878* (Boston, 1979), 112 (山本玉樹編著、前掲書、490頁)。

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」は「立身出世志向の勧め」⁽³⁵⁾ではなく、内村の言う「アムビシャス又はアムビション」の説明が的確といえよう。

日本語に訳せばまあ「野心」であらう。「野心」と謂ふて太閤秀吉やナポレオンの様な軍略的又は政治的な野心を考へせられるから、「大望」と云ふた方が良いと思ふが、解り易く申せば、将来自分が成し遂げてやらうとする仕事をしつかり決める精神を云ふのである。

夫れに就て今思ひ出すのは、エマーソンの言葉に“Hitch your wheels to the star”（汝の車を星につなげ）と謂ふのがあるが、これは「望を高く抱け」と謂ふ心をクラーク先生が「ボーイズ・ビー・アムビシャス」と平易に云ふた事を詩的に云ひ表はしたのであつて全く同精神に出で、ゐる。

高いアムビションを持つのは低いアムビションを持つより遙に善き事である。或人の云うた如くに「失敗は罪ではない、目的の低いのが罪である」。高い目的を持つことが人生を最も有意義に用ふる所以である⁽³⁶⁾。

ただ、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」については、「後年全国的に広まったにもかかわらず、クラークの離日後はほぼ十五年間、この言葉が札幌農学校関係の記録に全く見当たらないことは不思議である。」⁽³⁷⁾と云う指摘がある。それは「それは『諸君、しっかりやり給え』というほどのニュアンスをもったもの」⁽³⁸⁾に過ぎず、生徒たちに特に新たな感銘を覚えさせるものではなかったからであろう。そもそも ambitious は入学式で訓示された「崇高なる大志 (ambition)」と言う言葉の繰り返しである。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の意義が内村の言うような「将来自分が成し遂げてやらうとする仕事をしつかり決める精神」とす

(35) 鈴木俊郎『内村鑑三伝』岩波書店、1986、110頁。

(36) 内村鑑三『内村鑑三全集』31、岩波書店、1983、76頁。

(37) 馬場宏明『大志の系譜——高と札幌農学校』北泉社、1998、123頁。

(38) 鈴木俊郎、前掲書、110頁。

れば、同義語としてわが国には『孟子』「萬章章句下」⁽³⁹⁾に遡る「立志」という用語があり、教養ある一期生については当時よくなじんでいた心情であっただろう。また、明治初期の日本の精神的情况から、一期生は全て高い立志の青年で⁽⁴⁰⁾、平素「大志」を抱懐していた。従って「ボーイズ・ビー・アンビシャス」は、クラーク⁽⁴¹⁾を始め、創設期の札幌農学校に漲っていた精神という意味で「建学の精神」と言ってよいであろう。

次に、「フロンティア精神」も「崇高なる大志」の内容として挙げられよう。

「フロンティア精神」の文言は、クラーク、そして生徒の大島正健(1859~1938. 以下大島と表記)など一期生や二期生たちが使った例は見当たらない。そもそも札幌農学校の時代は北海道は未開のフロンティアであったが、明治日本自体が新社会・新文化のフロンティアであった。そして農学を始め科学・学問も創生期のフロンティアであった。当時「フロンティア精神」は時代精神であり、札幌農学校を志望した青年たちの胸にもともと「フロンティア精神」は豊かに常在していた。つまり生徒たちは札幌農学校で初めて「フロンティア精神」を喚起されたのではなく、そもそも彼らが札幌農学校を志願したときにすでに抱懐していたものである。

ただ、矢内原が言うに、札幌農学校で勉強した生徒たちは、「文化的な都会で楽しい享楽生活をするを魅力に考えないで、熊が出るような未開の土地に進んでは行って行き、そこで勉強し、かつその開拓に従事するという精神の少年たちであ」⁽⁴²⁾った。一期生が入学した1876(明治9)年のころの北海道は東京から遠く雪深い辺僻の地で、人口僅かに10万、札幌は2、3千に過ぎず、熊の住む夷狄の地と思われていた未開のフロンティアであった。そこで札幌農学校は新しい農業文化を創造しつつ自然未開の地を開拓することを現実的な課題としていた。また札幌農学校自体も日本最初の高等農業教育機関としてフロンティアで

(39) 小林勝人訳注『孟子』岩波書店、1972、167頁。

(40) 「この言葉を聞いた青年たちは、札幌農学校に入る前から志の人であった」(大山綱夫『札幌農学校とキリスト教』EDITEX、2012、172頁)。

(41) クラークが学生職員との訣別に際して残した一句は「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(Boys, be ambitious.)として人口に膾炙しているが、実際は“Boys, be ambitious like this old man.”であり、「この老人のごとく」が付け加わっていた。「この老人」とはもちろんクラークその人である。(大島正健、前掲書、278頁)。

(42) 矢内原忠雄、前掲『矢内原忠雄全集』第二十四巻、552頁。

あった。これらのことから札幌農学校は独特な「フロンティア精神」を必要としていた。かくして生徒たちにはアメリカの「フロンティア精神」を体現するクラークの感化のもとに彼ら固有の「フロンティア精神」が創成され⁽⁴³⁾、札幌農学校の「フロンティア精神」は他校の場合と異なる意義を有するに到ったのである。

しかし、「崇高なる大志」の意義において、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」や「フロンティア精神」にもまして重要な内容は「紳士たれ」ということであろう。

クラークは開校式の演説で「青年紳士諸子」(young gentlemen)と呼び掛け、最初から生徒を「紳士」と取り扱っている。さらに開校直後生徒たちを集めて次の訓辞をした。

この学校の前身である札幌学校には極めて細密な規則があって生徒達の一挙一動を縛っていたようであるが、その内容には非難すべき点はない。然し自分が主宰するこの学校ではその凡てを廃止することを宣言する。

今後自分が諸君に臨む鉄則は只一語に尽きる。

“Be gentleman”

これだけである。

ゼントルマンというものは定められた規則を厳重に守るものであるが、それは規則に縛られてやるのではなくて、自己の良心に従って行動するのである。学校は学ぶところであるから、起床の鐘が鳴ったらベッドを蹴ってとびおきねばならぬ。食卓へいく時には合図をするからすぐさま集り、礼儀正しく箸をとらねばならぬ。消燈時間には一斉に燈火を消して眠につかねばならぬ。出処進退すべて正しい自己の判断によるのであるから、この学校にはやかましい規則は不必要だ⁽⁴⁴⁾。

(43)「札幌の学生は一方『北門の鎖鑰』を確把しつつ、『北海の宝庫』を開拓せんとするアンビションを抱いて渡道し來ったので、世のいわゆる笈を負うて東都に『遊学』云々というが如き御曹子輩とは、おのずからその選を異にしたパイオニアであり、フロンティア・スピリットの持主であった。」逢坂信彦『黒田清隆とホーレスケブロン』北海タイムス社、1962、446頁。

(44) 大島正健、前掲書、92-93頁。

思いもよらぬクラークの宣言を聞いた生徒たちは非常に喜んだ。「我々はこれでもゼントルマンであるから俯仰天地に恥じない行いをしなければならぬ」と自ら問うて自ら答え、町へ出て醜い行為は決してなさず、自己の行動に対して大なる責任を感じるようになった⁽⁴⁵⁾。

「ゼントルマンの精神」が札幌農学校創設時に確立したことは第四期卒業（1884年7月）の志賀重昂（1863～1927. 以下志賀と表記）の回顧談からもうかがえる。

農学校の學生は明に此人（クラークを指す。引用者）の感化を蒙り、以來其思想をも支配されて居る。大抵の同窓生は酒と煙草を嗜まない。（中略）グード、シチズン善良なる公民紳士たろうと云ふ考へは、當時の同窓生一同の頭腦に深く染込んで居た⁽⁴⁶⁾。

札幌農学校の「公民紳士」たろうとする精神は教科書疑獄事件において天下に知られるところとなり、札幌農学校教育の評価を天下に高くした。この事件は、1902（明治35）年に発覚した、学校の教科書採用をめぐる教科書会社と教科書採用関係者との間の贈収賄事件である。全国の校長や教員が巻き込まれ嫌疑を受けたり有罪となった者も多数あった。しかし札幌農学校卒業生からだけは「総計三百有餘名の教育當事者を出して居るにも係らず、一人だに其事件に關係したものなく、新聞紙上に嫌疑者として掲載せられたものも一人だになかった。」⁽⁴⁷⁾。その理由をある教育家が志賀に問い合わせた時、志賀は、「元來當時の札幌農学校には學生の取締規則と云ふものは一つもなく、すべて生徒を紳士、として取扱ひ、規則はなくとも紳士は紳士らしからざる行爲あるべき筈はないと云ふやうな風に教訓されて居た。（中略）清潔なる金錢を得る事を學べ、清潔なる金錢を受くる事を學べ、これ人が自ら清くなり、人には迷惑を掛けぬ道である」⁽⁴⁸⁾と教えられたと答えている。

(45) 大島正健、前掲、93頁。

(46) 志賀重昂『志賀重昂全集』第八卷、志賀重昂全集刊行会、1929、157-158頁（日本図書センター、1995、復刻発行）。

(47) 前掲。

(48) 前掲。

iii) ピューリタニズム

札幌農学校の建学精神として、第三にピューリタニズムを挙げたい。ただ、その意義については若干の考察を加えたい。

「建学の精神」はその存在は創立者の言葉や文章の形を取って学内に公的に認知されているものである。ところがピューリタニズムは入学式における黒田の式辞及びクラークの演説に何ら見えることなく、札幌農学校のフォーマルな文化の中にはない。札幌農学校を源流とする北海道大学の「基本理念と長期目標」にも片言も見いだすことはできない⁽⁴⁹⁾。しかし蝦名は「札幌農学校の精神」として先ず「ピューリタニズムの起源への忠実な志向、ピューリタン精神」⁽⁵⁰⁾を掲げている。「建学の精神」が創立者の理想をいうとすれば、創立者の一人であるクラークが唱道するものであるから、私見も蝦名に賛同するところがある。

では札幌農学校のピューリタニズムやピューリタン精神とは何であったのか。それはクラークが確立しようとしたピューリタニズムを明らかにすることによってうかがえよう。

アメリカにおけるクラークは宗教的にはキリスト教の平信徒であり、彼のキリスト教はプロテスタント、ピューリタンのキリスト教⁽⁵¹⁾であった。従ってクラークが生徒に伝えたキリスト教信仰は『『ピューリタン宗教』のカテゴリーに属するものである』⁽⁵²⁾。クラークの「ピューリタン宗教」の特徴は、「個人的な回心、聖書に対する絶対的な信仰、道徳的な厳格さ、伝道心」⁽⁵³⁾などを強調するものとされている。そこでクラークのピューリタニズムは先ずキリスト教の、そしてプロテスタントの信仰を要素とするものである。そして彼の信仰は、彼が1877（明治10）年に札幌を去るに先だち起草した「イエスを信ずる者の誓約」によ

(49) 北海道大学評議会「北海道大学の基本理念と長期目標」2003年9月17日、<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/info-j/kihonrinen.html>

(50) 蝦名賢造、143頁。

(51) クラークの生地はマサチューセッツ州アッシュフィールドであり、ここにあった会衆派教会（Congregational Church、組合教会とも言う）でクラークは受洗した（小枝弘和、前掲書、10頁）。なお南北戦争時にプロテスタント教会は奴隷制廃止の賛否をめぐって分裂した教派も多かったが、会衆派の場合は会員がほとんど北部の廃止論者であった（曽根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局、1974、188頁）。そしてクラークも志願して北軍に従軍する。

(52) 大木英夫「日本におけるピューリタン宗教の受容」大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』南雲堂、1969、346頁。

(53) 「日本人キリスト者とアメリカ人宣教師」ジョン・F・ハウス（佐藤敏夫訳）M・B・ジャンセン編細谷千博他訳『日本における近代化の問題』岩波書店、1968、241頁。

く表明されている。この「誓約」はクラークの信仰告白というべきものである。

イエスを信ずる者の誓約⁽⁵⁴⁾

下に署名する札幌農学校の学生は、キリストの命に従いてキリストを信ずることを告白し、且つキリスト信徒の義務を忠実に尽して祝すべき主即ち十字架の死を以て我等の罪をあがない給いし者に、我等の愛と感謝の情を表し且つキリストの王国拡がり、栄光現われ、そのあがない給える人々の救われんことを切望す。故に我等は今後キリストの忠実なる弟子となりて、その教えを欠くことなく守らんことを厳かに神に誓い且つ互に誓う。

我等は適当なる機会来る時は、試験を受けて受洗し、福音主義の教会に加わらんことを約す。

我等は信ず、聖書は唯一直接天啓なる饗導者なることを。

我等は信ず、至仁なる創造者、正義なる主権者、最後の審判者なる絶対無限の神を。

我等は信ず、凡て真実に悔い改めて神の子を信じ、罪の救いを受くるものは、身を終るまで聖霊の導きを受け、

天父の思慮深き顧りみを蒙りて、遂に贖われたる聖徒となり、其の喜びを受け、其の業を勤むるに適いたる者とせらるべし。されど凡て福音を聞いて信ぜざる者は、必ず罪に亡びて神の前より永久に退けられるべきことを。

次に記する誠は、我等如何なる辛酸を嘗むるとも終生之を覚え、之に従わんことを約す。

汝、精神を尽し、力を尽し、意を尽し、主なる汝の神を愛すべし。又己の如く汝の隣を愛すべし。

汝、生命あると生命なきとに拘わらず、凡て神の造り給えるものに象りて彫みたる像若しくは作りたる形を拝すべからず。

汝の神エホバの名をみだりにいうべからず。

安息日を覚えてこれを聖日とせよ。この日には即ち凡て急を要せざるすべての業務を休み、勉めて聖書を研究し、己の徳を樹て、そ

(54) 大島正健、前掲書、113-116頁。

の他潔き生活のために用ゆべし。

汝の父母と有司とに従い、且つこれを敬うべし。

詐偽、窃盗、兇殺、姦淫若しくは他の不潔なる行為をなすべからず。
汝の隣を害すべからず。

断えず祈るべし。

我等は互に相扶け相励まさんがために、この誓約により一個の団体を組織し、これを「イエスの信徒」と称し、而して我等処を同うする間は毎週一回以上共に集りて聖書或は宗教に関する他の書籍雑誌を読み、若くは宗教上の談話をなし、また相共に祈祷会を開くことを誓約す。希くは聖霊我等の心の中に臨みて我等の愛を励まし、我等の信を堅くし、我等を真理に導きて救を得るに至らしめんことを。

一八七七年三月五日

於札幌 ウィリアム・エス・クラーク

ここに表れたクラークの信仰は、福音書を信仰の基礎とする福音主義による伝統の清教徒的信仰であり、「形骸にとらわれないまことの信仰」⁽⁵⁵⁾であった。従ってクラークは「クリスマスのような形式的な行事はあまり好まれなかった」⁽⁵⁶⁾。また、クラークの信仰は「平信徒的」⁽⁵⁷⁾であり、「神学者輩のドグマ的な、教派的執心」⁽⁵⁸⁾が見られないことも特徴である⁽⁵⁹⁾。

次にクラークのピューリタニズムの要素は伝道心である。

「ピューリタンは、個人の魂の救済を渴望し、自分の得た新生の体験を他の人びとにも及ぼそうとする運動であった。」⁽⁶⁰⁾。クラークもピューリタンの一平信徒として「さかんな伝道心」を持っていた。

クラークの伝道精神は次の賛美歌⁽⁶¹⁾「214 伝道」⁽⁶²⁾に「如実にあらわ

(55) 前掲、73頁。

(56) 前掲、108頁。

(57) 逢坂信彦『クラーク先生詳伝』丸善、1965、255頁。

(58) 前掲、255頁。

(59) 大島正健、前掲書、109-113頁に掲載の、クラークの特愛した賛美歌は、彼の信仰を明快に敷衍している。その一つは日本現行では『賛美歌』「271 信仰」(Just as I am, without one plea)で、日本基督教団賛美歌委員会編『賛美歌』日本基督教団出版部、1955)にある。

(60) 大下尚一訳・解説『ピューリタニズム アメリカ古典文庫 15』研究社、1976、16頁。

(61) 原文は英文である(大島正健、前掲書、110-112頁)。

(62) From Greenland's icy mountains MISSIONARY HYMN Reginald Heber, 1819 toward

れていて、特に聴者の感銘を深くした。』⁽⁶³⁾

1

北のはてなるこおりの山、
 てる日にやくるまさごの原、
 叫びもとむる声ぞひびく、
 「迷いのくさり解き放て」と。

3

上なき知恵にてらされたる
 我らはいかでこのひかりを、
 暗きにまよう世の民らに
 てらさで隠し秘めおくべき。

2

めぐみの露は草木にすら
 ゆたかにかかり、天つさかえ
 野にも山にもみちわたるを、
 などか人のみ罪に染みし。

4

大君イエスのみ代をしらす
 時のくるまでいよよ励み、
 救いのひかりたかくかかげ、
 あまねく照らせ、四方の国に。

クラークは本来キリスト教の伝道の意味を持っており、訪日にあたり「敬虔な信仰心」を若い学生に伝えることを企図していたようである。クラークの手紙に見える「私は横浜にいるギュリック博士から英語聖書三十冊を手に入れました。そして私はこれらの聖書を農学校に教科書として導入することを試みるつもりでいます。」⁽⁶⁴⁾ という文言も、この文脈で読むとその真意を理解しやすい。

札幌農学校においてクラークは「さかんな伝道心」をもって授業前において、日曜日にだけでなく、また、学生の訪問する官舎の夜において聖書を語った。学生の目にもクラークは「伝道の精神に燃えていた」⁽⁶⁵⁾ と見えた。

しかしクラークの伝道は、宣教師のような伝道のための伝道ではなく、人間教育（徳育）のための伝道であるところにその特徴があった⁽⁶⁶⁾。後年、帰米後のことであるが、クラークは「日曜日の晩第一教会日曜学校コンサートに際してまた彼らしい活気に満ちた演説を行った。

Mason, 1823 (「214 伝道」日本基督教団賛美歌委員会編、前掲書)。

(63) 大島正健、前掲書、110頁。

(64) 太田雄三『クラークの一年—札幌農学校初代教頭の日本体験』昭和堂、1979、87頁。

(65) 大島正健、前掲書、112頁。

(66) 「クラークは着任勿々バイブルを一の文學且修身書として用ひ、毎朝授業前に其數節を朗讀し、基督教に關する主義及び信仰を説く所あり。」北海道帝国大学編、前掲『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』、66頁。

そして、今度はもっとくわしく日本で聖書を教えたことについて語った。(中略) その中心は聖書をただ学ぶだけでなく、それを毎日の生活に適用することが重要であるということであった。彼は日本へ農学校を設立するために呼ばれたが、彼は日本人がどんなによい人格と道徳を尊ぶかを知っていたので、そのことを聖書を導入するための出発点として利用した。』⁽⁶⁷⁾と伝えられている。

クラークの伝道心は一期生に継承され、二期生は伝道の対象となった⁽⁶⁸⁾。しかし二期生にはその伝道心は継承されず、三期生に対して布教活動をした事実は残っていない。

第三にクラークのピューリタニズムの要素は道徳的な厳格さである。

ピューリタンはその敬虔な信仰に根ざした道徳的な厳格さ、即ちきびしい性道徳、禁酒禁煙、聖日厳守、奉仕の精神を持ち、これらはすべてその倫理的規範を構成した。

クラークの「道徳的な厳格さ」を象徴的に表明する文書が「禁酒禁煙の誓約書」である。この「誓約書」はクラークは1876(明治9)年11月29日自ら作って、率先して署名し、ホイーラー、ペンハローが相次いで署名したもので、その内容はつぎのとおりである⁽⁶⁹⁾。

誓約

我等ここに署名する札幌農学校の職員及び学生は、本校に関係を有する限り、薬用としての外いかなる形においても阿片、煙草及び酒類の飲用を禁じ、且つ賭博、及び冒瀆的妄語を謹むことを厳かに誓う

1876年11月29日

ウィリアム・エス・クラーク

ウィリアム・ホイーラー

デー・ピー・ペンハロー

(67) 太田雄三、前掲書、152-153頁。1877年10月17日付の『アマスト・レコード』の記事とある。

(68) 例えば、佐藤昌介(一期生)はクラークに「彼等を生命と真実の道へ導くために、私としては他の兄弟たちと共に全力を尽くしたい」と書き送っている(クラーク著佐藤昌彦他編・訳『クラークの手紙』北海道出版企画センター、1986、26頁)。「彼等」とは18名(岩崎、内村たちの二期生)の新入生を言う。

(69) 逢坂信彦『クラーク先生詳伝』、前掲書、169頁。

「誓約書」には、伊藤一隆ら第一期生が、その後、ブルックス（William Penn Brooks. 1851～1938. 第四任教頭）も署名した。次に第二期生全部もこれに署名したのである。ここに札幌農学校の教職員において禁酒、禁煙を中心とする禁欲的・道徳的な生活態度が発祥した。その生活態度は一期生、二期生において堅持され、「飲酒の風、喫煙のごときもようやく学校のなかから消え失せ、札幌農学校においては長らく清教徒的な伝統がつづいてゆくようになった」⁽⁷⁰⁾とされている。

クラークが導入したプロテスタンティズムはピューリタニズムであった。内村は、「私の信仰はピューリタン主義の本場たる新英洲（ニューイングランド）より来りたることは確実である。」⁽⁷¹⁾と云うが、他の一期生、二期生の信仰もニューイングランドに由来し、ピューリタニズムの特色を濃厚に持っているといっていだらう。蝦名は、クラークによる「プロテスタンティズムの札幌農学校への導入」は「札幌農学校のバック・ボーンとなってゆく」⁽⁷²⁾と云う。しかし、札幌農学校のピューリタニズムは創設期においても原義のピューリタニズムと呼ぶまでに成熟したとは言いがたいのである。というのもピューリタニズムとはピューリタンの信条と生活実践であるが、その要件を十全に満たしていないからである。

先ずピューリタニズムの最も基本的な要素と云うべきものはピューリタンの信条であるキリスト教信仰であるが、キリスト教信仰に入ることを決心した者に署名を求めた「イエスを信ずる者の契約」に一期生全員⁽⁷³⁾の16名が署名した。クラークは1877（明治10）年5月に札幌を離れたが、その後、同年10月から12月までに二期生19名中15名が署名した。この故か、クラークは1886（明治19）年、臨終に際して「私は私の生涯でやった色々なことを振り返って、心の中にこの上なく満足に思うのは日本の少年をキリストに導いたことであつた。」⁽⁷⁴⁾と語つたという。一期生の大島は「クラーク先生が札幌に来て選ばれた青年達の胸に播かれたその信仰の種が如何に見事に成育したことよ。」⁽⁷⁵⁾と述べている。

(70) 蝦名賢造、前掲書、48頁。

(71) 内村鑑三『内村鑑三選集』第三卷、岩波書店、1990、51頁。

(72) 蝦名賢造、前掲書、143頁。

(73) 北海道帝国大学編、前掲『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』、66頁。

(74) 大島正健、前掲書、282頁。

(75) 前掲、73頁。

しかし、生徒の大半が回心したのは二期生までで、その後は生徒中にキリスト教に反発するグループも生まれ、1878（明治11）年の初めごろには両者の対立が表面化するという問題も起きた⁽⁷⁶⁾。クラークや大島の言にも関わらず、札幌農学校のキリスト教信仰は咲いても実を結ばない徒花のように終わった。キリスト教信仰を抜きにしたピューリタニズムは真のピューリタニズムとは言えまい。また、ピューリタンの伝道心も確立しなかった。このような意味でピューリタニズムは創設期において充分には成立しなかった。ただ、「道徳的な厳格さ」だけが「建学の精神」のピューリタニズムとして札幌農学校の校風ともなった。

3 札幌農学校の性格・特質

学校の「性格」や「特質」は「建学の精神」に関連しており、ここにふれたい。

札幌農学校の「性格」や「特質」は、「建学の精神」とは異なり「建学の精神」の具体化の問題で、「建学の精神」から生み出された学校の個性であり校風・学風である。

矢内原は、札幌農学校の性格として「札幌農学校はクラーク博士がアメリカのカレッジの特色を移して教育をしたところでありまして、その長所の一つとして一般教育を盛んにしたのであります。」⁽⁷⁷⁾と言う。また、永井秀夫（1925～2005. 以下永井と表記）は札幌農学校の特質として「人文諸科学をふくむ一般教育とキリスト教をふくむ全人教育」⁽⁷⁸⁾を挙げている。

札幌農学校は、マサチューセッツ農科大学をモデルとして、近代科学を導入しかつピューリタニズムに基づく人間教育を重視するところから、クラークは開校の演説の中で、「徳性の訓練」を言い、「諸子の健康を保ち、諸子の食欲と情欲とを制し、従順勤勉の習慣を養ひ、且諸子が勉学の機会を有する種々の学科に就き能ふ限りの知識と熟練とを獲得せよ。」と訓示しているように、知的、道徳的、身体的な発達、すなわち人間性の全人的な発達を期待している。それはマサチューセッツ農科大

(76) 北海道大学編・発行『北大百年史 通説』1982、66頁。

(77) 矢内原忠雄、前掲『矢内原忠雄全集』第二十四巻、552頁。

(78) 札幌市教育委員会編『農学校物語』北海道新聞社、1992、117頁。

学に設定された「農業に精進し、十分な教育を施され、知的訓練を経、肉体的に適し、道徳的に高められ、美的に洗練され、しかも祖国を守ることのできる卒業生を世に送り出す」⁽⁷⁹⁾という全人教育を志向する目標と全く同様である。

このような教育方針に基づき、札幌農学校の開校当時の教育課程は、「自然科学に関する基礎學科並に農學及びこれと關係深き諸學科の外、第一年より第三年に至る各級を通じ英語（三年級の第二學期には英文學史）あり、第一及第二年級には演説法あり、又第三年級に於ては天文學及び英作文あり、第四年級に入れば心理學、經濟學及び英語演説あり、要するに形而上の學問相當に多し。」⁽⁸⁰⁾であった。広汎な知的な力と並んで道徳的な力を培うものとして「聖書教育」が行われ、軍事教練と身体的な力の發達のために「体操・兵學及用兵學」（「札幌農學校諸規則」）が編成された。札幌農學校の教育課程は、「本校は名は農學校と呼ぶも、其創立の際に在ては必ずしも名實相添ふものと謂ひ難く、學科の内容頗る廣汎なるを見る。」⁽⁸¹⁾という全人教育的な特色を持っていた。矢内原は「札幌農學校はクラーク博士がアメリカのカレッジの特色を移して教育をしたところでありまして、その長所の一つとして一般教育を盛んにした」⁽⁸²⁾と言うように、教育課程には人文諸科學をふくむ今日で言う一般教育が編入されていたことは一特色であるが、それは全人教育の一環であることに留意しなければならない。

ただ思うに札幌農學校のいわゆる「一般教育」は自由教育（liberal education）と呼ぶのがふさわしいようである。というのも、「一般教育を知る前に、自由教育（liberal education）が存在していたことを認めなければならない（中略）。自由教育は、歴史的には一般教育へ至る前段階とみることができる。すなわち、それは、自由社会到達への過程において、選良階級または貴族階級のいわゆる指導者層が大学の課程で身につける教養であった。」⁽⁸³⁾という指摘に拠るからである。すなわち札

(79) ジョン M. マキ、前掲書、1978、111頁。

(80) 北海道帝国大学編、前掲『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』、59頁。

(81) 前掲。

(82) 矢内原忠雄、前掲『矢内原忠雄全集』第二十四卷、552頁。「名は農學校でありましたが、決して農學だけを専門的に教えたわけではなく、今日の言葉でいうならば、一般教育、すなわち広い教養をあたえる制度でありました。これはアメリカのカレッジの制度をそのまま実施したのであります。」矢内原忠雄『教育と人間』東京大学出版会、1961、131頁。

(83) 大学基準協会創立十年記念論文集編纂委員会編『新制大学の諸問題』大学基準協会、

幌農学校の目的は黒田が「英を育し」という言葉で望んだように、またある生徒が自覚しているように「人の上に立ち人を導かんとする者」⁽⁸⁴⁾、すなわち指導者の育成にあり、札幌農学校の教養は「よき市民」、そして「指導者」のためのものであった。そこで札幌農学校では人文諸科学をふくむ全人格的な自由教育が志向されており、大島の綴る同期生伊藤一隆の小伝の表現に見えるように札幌農学校の初期には「人格を重んずる自由教育」⁽⁸⁵⁾が行なわれたのである。

4 結び

札幌農学校において「建学の精神」を論ずる場合、「札幌農学校の精神」と「クラーク精神」は厳密には区別されるべきであろう。蝦名が「クラーク精神」という用語の他に「札幌農学校の精神」という用語も使用していることは示唆に富んでいる。札幌農学校の「建学の精神」はしばしば「クラーク精神」とされるが、これは妥当であろうか。

第一に、「札幌農学校の精神」は建学に当たった黒田の構想がそもそもあり、黒田のいわば幕僚であり札幌農学校の精神的黒柱であったクラークがその意を忠実に受けとめつつ自らの理想を展開したもので、黒田とクラークの双方の思いが一致して成った統合的理念である⁽⁸⁶⁾。本稿では黒田の構想が「建学の精神」に重要な存在として認められ、「クラーク精神」は「札幌農学校の精神」に包含されるものであることを強調したい。

第二に、「クラーク精神」は「崇高なる大志」に由来する「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(青年よ、大志を抱け)を内包しているが、その外延はもっと広く豊かな意味がある。

「クラーク精神」はクラークも使用しており、それはクラークが帰米後、1880年10月9日付で、マサチューセッツ アマーストから一期生の内田瀨(1858~1933)に書いた手紙に見られる。

1957、334頁。

(84) 大島正健、前掲書、104頁。

(85) 大島正健「故伊藤一隆小伝」札幌同窓会編・発行『札幌同窓会第五十一回報告』1929。

(86) 黒田の配慮と信頼なくしてクラークの理想は実現しなかったであろう。参照、「札幌農学校が専門学校の定義に抵触するような教育理念をもち得た理由は、導入したクラークの尽力は当然であるが、開拓使長官としての黒田の配慮、そして札幌農学校が東京から遠く離れ情報が届き難い北海道にあるという地理的条件であろう。さもなければ、札幌農学校の特異な性格は実現し得なかったであろう。」(小枝弘和、前掲書、308頁)。

以前の私の生徒の多くが正しき道を立派に耐えぬき、優等で卒業したことを知り、大きな喜びを感じています。特に、君のいうところの「クラーク精神」(Clarkii Spirit) がいまだに君の内に宿り、すべての貴い大目的にむかって君を活発で熱心な仕事にかきたてていることを知って、喜びにたえません。日本でたった一年の間に神の摂理のうちにゆるされて成し遂げた私の仕事は、ふりかえってみると私の生涯のうち最も興味ぶかく、重要にみえることは本当に確信を持てることです。あの年は楽しみと実りに満ちた日々の連続でした。あの成果をだれが評価しきれましょうか。君の信仰と熱意と大志 (the faith, the zeal and the ambition) とが失われることのないよう神が守られますように。これらは今の君を際立たせているところのもので、君の国とキリストの大義につかえるために、君に立派な資格を与えるものです⁽⁸⁷⁾。

内田第一期生が、クラークから教えられた、教育や宗教についての彼の思想・理念・流儀などを「クラーク精神」(クラークの手紙には“Clarkii Spirit”と記されている)と呼び、クラーク自身もそのことを知っていたことは興味深い⁽⁸⁸⁾が、では「クラーク精神」とは何か。

それはクラークの手紙にあるように「信仰と熱意と大志」にはほぼ集約されるものであり、この内「最も偉大な教え」⁽⁸⁹⁾は信仰であろう。また、矢内原はクラークの「アンビシャス」を「いかなる人生観を持ち、どういう生活態度で人生を歩むかという道徳的な欲求がクラーク先生の残された『アンビシャスであれ』という教えの内容」⁽⁹⁰⁾とし、「自己の能力をのばして社会に貢献する志が、クラーク博士の『ボーイズ・ビー・アンビシャス』といわれた意味であると思うのであります。すなわち、いかにして権力を得るかとか、お金をもうけるかとかいう立身出世の道でなくて、何をもって日本国民に、あるいは世界人類に貢献するか、その道を自ら見出し、それに適した自分の能力と天分を十分に発揮する、そういう意味におけるアンビションを内容としておるのでありますよ

(87) クラーク、前掲書、1986、96頁、218頁。

(88) 馬場宏明、前掲書、129頁。

(89) クラーク、前掲書、116頁。

(90) 矢内原忠雄、前掲『教育と人間』、133頁。

う。』⁽⁹¹⁾と解釈しているが、ここに言う「アンビション」、「アンビシャス」もクラークの「崇高なる大志」の本旨にかなう「クラーク精神」の内容といえよう。

「クラーク精神」について、「わずか八ヶ月の札幌滞在のうちに佐藤昌介、大島正健などの一期生に植えつけられた『クラーク精神』は新渡戸稲造、内村鑑三などの二期生に受けつがれてみごとに実りました。」と評されている⁽⁹²⁾。

岩崎たちが過ごした札幌農学校時代はこのような「建学の精神」に基づく校風を持った札幌農学校の学校文化、すなわち精神的風土において展開された。そしてその学校文化による感化は岩崎たち二期生にも浸透して彼らの生活と生涯を決定し、鼓舞するものとなった。

では、「札幌農学校の精神」の下で岩崎たちが送った札幌農学校生活はどのようなものであったか、これについては稿を改め、「岩崎行親と札幌農学校—札幌農学校生活—」を主題とし、今後の研究課題としたい。

本稿は鹿児島純心女子短期大学図書館から多大のご支援をいただいて成った。付記して感謝申し上げる

(鹿児島純心女子短期大学前副学長)

(91) 前掲。

(92) 逢坂信憲「クラーク精神とは」山口哲夫編『クラーク精神と北大東京同窓会三十年の歩み』東京エルム会、1975、88頁。